

【 復活のトロパリ 第4調 】



しゅのおんなでし子はふくかつのひかるおと
主 女 弟 子 復 活 の 光 音

づれを てんしより ききうけ て、
天 使 聞 受

げんそよりのていざいをふる いすて、しと
原 祖 定 罪 振 棄 使 徒

にほこりていえ り、し はほろぼさ
誇 曰 死 滅

れ、ハリストカミはふくかつして、せかいに
神 復 活 世 界

おおいなるあわれみをたま え り。
大 憐 賜

【 列祖のトロパリ 第2調 】



ハリストカミよ、なんぢはれっそをしんによりにてぎ
神 爾 列 祖 信 由 義

なるものと な し、かれらをもつてしよ
者 爲 彼 等 を 以 諸

みんよ りきょうか いをへいていしたま え り。
民 教 會 聘 定 給

せいなるものはこ う え い に あ り て い わ
聖 者 光 榮 在 祝

う、けだしそのたねよりしゅくふくせられた
蓋 其 種 祝 福

る み は い で た り 、 こ れ た ね な く な ん ぢ
 果 出 是 種 爾
 を う み し も の な り 。 か れ ら の き と う
 生 者 彼 等 祈 禱
 に よ り て わ れ ら を す く い た ま え 。
 由 我 等 救 給

【 列祖のコンダク 第6調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、
 光 榮 父 子 聖 神 歸
 い ま も い つ も よ よ に ア ミ ン。
 今 何 時 世 世
 み え に ふ く た る も の は て の し る し た る か た ち
 三 重 福 者 手 記 像
 を う や ま わ ず し て 、 し る さ れ ぬ し ん せ い に
 敬 記 神 性
 よ う ご せ ら れ て 、 ひ の げ き じ ょ う に え い を
 擁 護 火 劇 場 榮
 え た り 。 か れ ら は た え が た き ほ の お
 獲 彼 等 堪 難 焰
 の う ち に 立 ち て 、 か み を よ べ り 、 あ あ か ん
 中 立 た 神 呼 鳴 呼 寛
 ゆ う の し ゅ よ 、 い そ げ 、 じ れ ん な る に よ
 宥 主 急 慈 憐 因



司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌 頌 せられ、
ヘルヴィムより讃 榮せられ、 悉 くの天 軍より伏 拜せられ、萬物を無より有
となし、人を 爾 の像と 肖 とに依りて造り、爾 が 諸 の 賜 を以て之を飾
り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を 行 う者を棄てずして、其 救 の爲に
痛 悔を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の諸 僕を、此の時に於ても、 爾 が
聖なる祭 壇の光 榮の前に立ちて、爾 に當 然の伏 拜讃 榮を 奉 るに堪うる
もの 者となしし主 宰よ、 爾 親 ら我等罪 人の口よりも聖 三の歌を受け、 爾 の
仁 慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈
と 體 とを聖にし、我等に 生 涯善 功を以て 爾 に務むるを得せしめ給え、聖
なる 生 神 女と古世より 爾 の 喜 を爲しし諸 聖 人との祈 禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、 爾 は聖なり、我等光 榮を 爾 父と子と聖 神に献ず、今も何時も世
に、



【 聖三祝文 】





よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 めよ。こうえいはちちとことせいしん
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 諸祖の歌 第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん 爾の神にも、

司祭) えいち 睿智、

誦經) しゅわ せんぞ かみ なんぢ さんよう なんぢ な よよ さんびさんえい
プロキメン、主我が先祖の神よ、 爾は讃揚せられ、 爾の名は世々に讃美讃榮せら
る、



誦經) けだしなんぢ およ われら おこな こと おい ぎ
蓋 爾は凡そ我等に行いし事に於て義なり。



誦經) しゅわ せんぞ かみ なんぢ さんよう
主我が先祖の神よ、 爾は讃揚せられ、



【 アポストロス 使徒經 257 端 コロサイ書3章4～11節 】

司祭) えいち 睿智、

誦經) せいしと じん たつ しよ よみ
聖使徒パヴエルがコロサイ人に達する書の讀、

司祭) つつし き 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい なんぢら いのち}兄弟よ、爾等の生命たるハリストスの ^{あらわ とき なんぢら かれ とも こうえい うち あらわ}現れん時、爾等も彼と偕に光榮の中に現
^{ゆえ なんぢら ち あ したい ころ すなわちいんこう おかい じゃし あくよく およ たんらん}れん。故に 爾等の地に在る肢體を殺せ、^{すなわちはいぐうぞうこれ}即 拜偶像是なり、^{これら ため かみ いかり さからい こ のぞ なんぢら さき かれら}此等の爲に神の怒は悖逆の子に臨む。爾等も曩に、彼等の
^{うち お とき これ おこな いま なんぢら いかり いきどおり うらみ そしり なんぢら くち}中に居りし時、之を行えり。今は 爾等も忿怒、^{いだ は ことば いつさいこれ さ たがい いつわり い なか けだしなんぢらふる ひと そのおこない}恚憾、怨恨、謗讟、爾等の口より
 出す愧づべき言、一切之を去れ、互に 謊を言う勿れ、蓋 爾等舊き人と其行
^{ぬ あらた ひと すなわちかれ つく もの かたち したが ちしき あらた もの き}とを脱ぎて、新なる人、即 彼を造りし者の像に 循いて知識の改めらるる者を衣
^{ここ じんおよ じん かつれいおよ むかつれい ヴァルヴァロおよ どれい}たり。此にはエルリン人及びユダヤ人、割禮及び無割禮、夷狄及びスキト、奴隸
^{およ じしゆ もの すなわち いつさい およ いつさい うち あ}及び自主の者なし、即 ハリストスは一切なり、及び一切の中に在り。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう。だから、地上の肢体、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪欲、また貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。これらのことのために、神の怒りが下るのである。あなたがたも、以前これらのうちに日を過ごしていた時には、これらのことをして歩いていた。しかし今は、これらいつさいのことを捨て、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を、捨ててしまいなさい。互にうそを言ってはならない。あなたがたは、古き人をその行いと一緒に脱ぎ捨て、造り主のかたちに従って新しくされ、真の知識に至る新しき人を着たのである。そこには、もはやギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、未開の人、スクテヤ人、奴隸、自由人の差別はない。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにいますのである。

【 アリルイヤ 諸祖の 第4調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{しさい うち およ かれ な よ もの うち}司祭の中にモイセイ及びアアロンあり、彼の名を呼ぶ者の中にサムイルあり、



誦經) ^{かれらしゅ よ しゅこれ き} 彼等主に呼びしに、主之に聴けり、



^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ} を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン
福音經 ルカ福音書 76 端 14 章 16～24 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) つつし き しゅ さ たとえ もう い あるひととおい ばんさん もう おお
 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、或人 大なる晩餐を設けて、多くの
 もの まね ばんさん とし およ そのぼく つかわ まね もの い きた けだし
 者を招きたり。晩餐の時に及び、其僕を遣して、招かれたる者に謂えり、來れ、蓋
 いつさいすで そな かれらみなおな じ だいいち ものい われでんち か ゆ
 一切已に備われり。彼等皆同じく辭したり。第一の者曰えり、我田地を買いたり、行き
 これ み よう こ わ じ ゆる た ものい われうしいつが い か これ
 て之を見んことを要す、請う、我が辭するを允せ。他の者曰えり我牛五 耦を買いたり、是
 こころ ため ゆ こ わ じ ゆる またた ものい われつま めと こ ゆえ
 を試みん爲に往く、請う、我が辭するを允せ。又他の者曰えり、我妻を娶りたり、是の故
 きた あた そのぼくかえ これ しゅ つ かしゆいか そのぼく い すみやか
 に來る能わず。其僕歸りて、之を主に告げたれば、家主怒りて、其僕に謂えり、速
 まち ちまた こうぢ い まづしきもの かたわ あしなえ めしい ここ ひ きた ぼくい
 に邑の衢と巷とに出でて、貧乏、廢疾、跛者、瞽者を此に引き來れ。僕曰えり、
 しゅ なんぢ めい ごと おこな なおあま ざ しゅ ぼく い みち およ まがき
 主よ、爾の命ぜし如く行いたれども、尚餘れる座あり。主は僕に謂えり、道路及び藩籬
 あいだ い い せつとく わ いえ み けだしわれなんぢら つ か まね
 の間に出でて、入らんことを説得して、我が家に盈たしめよ。蓋我爾等に語ぐ、彼の招
 かれたる人は、一も我が晩餐を嘗めざらん。蓋召されたる者は多けれども、選ばれたる
 もの すくな
 者は少し。

(比較用 口語訳) そこでイエスが言われた、「ある人が盛大な晩餐会を催して、大ぜいの人を招いた。晩餐の時刻になったので、招いておいた人たちのもとに僕を送って、『さあ、おいでください。もう準備ができましたから』と言わせた。ところが、みんな一様に断りはじめた。最初の方は、『わたしは土地を買いましたので、行って見なければなりません。どうぞ、おゆるしてください』と言った。ほかの方は、『わたしは五対の牛を買いましたので、それをしらべに行くところです。どうぞ、おゆるください』、もうひとりの方は、『わたしは妻をめとりましたので、参ることができません』と言った。僕は帰ってきて、以上の事を主人に報告した。すると家の主人はおこって僕に言った、『いまずぐに、町の大通りや小道へ行って、貧乏人、不具者、盲人、足なえなどを、ここへ連れてきなさい』。僕は言った、『ご主人様、仰せのとおりにいたしました。まだ席がございます』。主人が僕に言った、『道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい。あなたがたに置いて置くが、招かれた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう』。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金ロイオアン) へ